ている。著者は近世初期の豪商の武士的な気概、冒険商人の豪奢に対して、本商人の合理精神を多面にわたってとく。他方、偽満的な功利主義、卑屈な忍耐についても指摘する。こうした商人の精神状況の雑多な側面をどのように理解したらよいのか。いろいろの面が指摘され、しかも相互に矛盾する側面がある場合、なんらかのイメイジを画こうとすれば、なにかを軸にそれら諸側面を位置づけしなければならない。そうした意味で、それぞれの商人がおかれていた時期や状態、経済の一般事情および一般事情の個々の経営にとっての意味がとわれなくてはならない。同じ大商人でも呉服・両替を主業とした三井家と高利貸に専門化した鴻池とでは、あらかに意識のあり方はことなる。まして問屋商人や在郷商人にまでなれば、非常に異った情況にたたされている以上、相当ちがった性格をもっていたと想像される。商人意識の研究も、そうした点までほりさげて研究する段階にきたように思う。著者も、享保期ごろから家訓・店則が作られるようになったとし、「武家財政のたてなおしをめざした享保の改革によって、受難期をむかえた町人は、組織をととのえ、堅実な経営をもるための防衛体制として家訓・店則を制定した、とみることができる」(二〇三頁)と企業精神の保守化が一定の時点で発生したことを認めている。このような体制的な、段階的な理解が広く採用されていれば、本書の意義は一段と大きかったであろうと思われる。

(一九六六・二・一七)

(A5判　三一〇頁　索引四頁　昭和四〇年一一月　ミネルヴァ書房刊　定価　九六〇円)

(同志社大学助教授)

富岡次郎著

イギリス農民一揆の研究

飯沼二郎

1

総計七〇〇ページを超える本書を手にして、私は、一〇年の歳月を費して遂にこの研究を完成しえた著者の感慨が、どんなに大きいものであったかを、思わずにはいられなかった。若き日に、全身全霊をもって打ちこみうる課題と時間と体力とをもちえた研究者は幸いである。おそらく、今後、本書は、富岡氏自身の生涯における一つのモニュメントとなるとともに、また、日本の西洋史学界全体におけるモニュメントともなるにちがいない。

富岡氏が、この研究に従事しておられた一〇年間に、日本はずいぶん大きく変化した。とくに、敗戦直後の一〇年間についての評価の変化はめまぐるしく、あの時期は、日本人が自分の心を、民族の心を見失っていた時期なのだという考え方が、最近では、むしろ、支配的になりつつある。しかるに、富岡氏は、敗戦直後の一〇年間を、自己の人格の形成された時期、すなわち自分の心のつくり上げられた時期として、その時期と現在の自己との直接的な連続性を、はっきりと肯定される。そこに、本書を一貫する基本的な性格がある。まず、著者自身の口から、このことを語っ

てもらうことにしよう。

「戦争の痛手をもっとも強くうけた私たちの世代は、敗戦の混乱と虚脱状態のなかで、学生生活をはじめた。古い権威や価値体系はすべてくずれ去り、きびしい深刻な現実のなかから、新しいものが生れ出でようとしていた。日本の歴史のなかでいまだかつてみられなかったほどの昂揚をしめした労働運動や学生運動は、若い私の情熱をかきたてた。当時の私には、新しい日本社会の民主化のために、なにか役立ちたいという気持でいっぱいであった。そして、日本の民主化のためには、まず何よりも真先に封建的残滓を完全に根絶し、日本の近代化をおしすすめることが、第一の課題であると考えた。（中略）イギリスは世界の歴史のなかでもっとも早く資本主義を発展させた国であるゆえ、その近代化の研究は日本の近代化を考えるために役立つであろうと思い、イギリス資本主義成立の研究にとりくんだ。（中略）

学問研究は、現実社会の発展に直接的に役立つものばかりではないということを、十分にわきまえているつもりであったが、激動する日本社会の現実をまえにして、私の心はつねにあせっていた。そうしたなかで私の心を研究につなぎとめてくれたのは、『私たちこそ戦後日本の新しい学問を創造しているのだ』という若い戦後研究者のささやかな自負であった。新しい日本社会をきずくために、私たちは新しい歴史学を創造しなければならない。新しい歴史学の創造は新しい日本社会の要請であるということを、私の心にいいきかせてきた。私のつたない『イギリス農民一揆の研究』も新しい歴史学研究の一端をにない、日本社会の前進のためになんらかの役割を果し得るであろうということを信じて、研究をつづけてきた。」（序一―三ページ）

このような基本的な性格を、まず、はっきりと認識した上で、本書は読まれなければならない。

2

日本の近代化、民主化をおしすすめるためにイギリス史の研究にとりくんだ著者は、当然、中世においてイギリス国民の大部分をしめた農民の、領主にたいする闘争に注目することになった。なぜなら、「封建権力にたいする農民の抵抗をぬきにして、近代化などあり得ない」（序二ページ）からであった。

こうして著者は、中世におけるイギリス農民一揆の研究に没入していったが、その最初の実りが、「恩寵の巡礼」についての研究であった。著者はそこで、イギリス農民一揆を分析するための一つの方法論を、辛苦のすえに確立した。それは、まず、第一に、「蜂起の発端」を調べる。これによって、ほんとうに一揆を望んだ階層がはっきりと浮び出てくる。次に、「反乱軍の構成」を検討する。これは、一揆の指導層および反乱の起動力となったエネルギーを分析するために、もっとも必要な手続きである。第三に、「反徒の要求」をみる。これも、いうまでもなく、反乱の性格をみるための手段である。第四に、「反徒の攻撃対象」を考察する。これは、農民の抵抗のエネルギーが、どのような方向にむけられていたかを明らかにするためである。最後に、「反乱の挫折あるいは終焉」を検討し、この反乱の歴史的意義を考える、というものであった。

著者は、このような方法論に基づいて、中世中期から市民革命までの時期におけるイギリスの著名な農民一揆を一つ一つ実証的にとりあげていった。そのために必要な基礎史料は、おそらく、今日、これ以上のものを蒐集することが不可能と思われるほど、徹底的に探求された。今後、イギリス農民一揆に関心をもち、それについて発言しようとする者は、本書を無視して、研究を進めることはできないであろう。

このような研究の過程で、著者は、右の方法論の正しさについて疑問をもたれたこともあったようである。人は努力するかぎり迷う。しかし、こうして、いま、それらの研究成果が一つにまとめられ、綜括されてみると、この方法論をもって一貫されたことの正しさは、もはや疑いの余地なく、明瞭となってくる。

本書の内容を詳細に紹介することは本稿の性質上、避けなければならないであろう。幸い、著者みずから、イギリス農民一揆についての綜括的な考察を、本書の最後に「結語」として行っておられるので、その部分を中心として、簡単に著者の考えの基本線をたどってみたい。

3

イングランドでは、一三世紀に、封建領主制支配が絶頂に達した。領主的商品経済が発展し、首都市場圏が勃興し、海外への農産物輸出がさかんになり、各地方市場においても、領主の農産物売却がにぎわいはじめ、領主は直営地経営を拡大した。その結果、農民の賦役はいちじるしく増大され、領主の農奴にたいする搾取が強化された。

このような領主支配の強化にたいし、農民は抵抗したが、合法的な訴訟闘争や消極的な日常闘争だけでは、とうてい、領主にたいして勝つ見込みはなかったから、いきおい、暴力的非合法闘争を展開せざるを得なかった。その結果は、黒死病による農業労働人口の激減とあいまって、賦役の金納化を一般的に進行せしめるにいたった。このようなマナー経営の構造転換とともに、上部構造の領主制にも転換が促された。そして、そのような社会的基盤の上に、イングランド最初の大農民一揆である一三八一年の大反乱が勃発する。反徒の構成は、富農の指導の下に中小農と都市手工業者が主体勢力であった。この大反乱は領主層の反撃によって失敗におわったが、しかし、以後、賦役の金納化はますます一般的なものとなっていく。

賦役制の実質的解体は、農民のなかに富農層の発達を促す。こうした情勢の下に、一四五〇年、ジャック・ケイドの反乱がおこる。この反乱は、毛織物工業を基軸とした農民的商品経済の最も発展していた東南部と東部を中心とし、エスクワィアとジェントリという地主層によって形成されたが、主体勢力はヨーマン、牧畜業者、ハズバンドマンなどの農民層と、毛織物工業関係者、海運業者、諸種の手工業者および日雇労働者であった。要するに、これは、封建家臣団に支えられた大貴族の支配体制にたいする新興地主層の指導する反体制運動であった。

やがて、大貴族相互間の勢力争いはいよいよ激化し、長期の内乱の結果、その大半は没落し、新興地主層を階級的基盤として、イギリス絶対王政が成立する。その確立の過程で、北部諸州に、「恩寵の巡礼」とよばれるカトリック教徒の大反乱がおこる。こ

の反乱は二つの段階に分れ、第一段階では一般農民だけの反乱であったが、第二段階では新たに加入した下級貴族、新興地主層が指導権を握る。地主層は反乱を利用して国王に譲歩を迫り、それに成功するや、休戦に入る。そして、再蜂起をした農民軍の鎮圧にみずから力を貸す。この反乱を契機として、北部諸州における巨大領主勢力の破砕、ジェントリ地主制の形成、ジェントリによる絶対王政官僚制の確立が完成する。

その後、絶対王政によるカルヴァン派的宗教改革に反対して、一五四九年、今度は、西部諸州に反乱がおこる。反徒の中心勢力は下級聖職者、一般農民、手工業者、日雇労働者であり、地主層はごく僅かであった。しかも、彼らは、参加を強制されたものにすぎず、なんら積極的な役割は果さなかった。「恩寵の巡礼」とおなじく、この反乱もまたカトリック教徒による宗教反乱ではあったが、イギリス絶対王政による宗教改革で利益を獲得したジェントリ層の勢力増大を阻止しようという意図があり、それ故、反徒の攻撃は貴族とジェントリ層に集中したのであった。

同じ一五四九年に、当時の先進地帯である東部で、「ケットの反乱」がおこった。これを指導したのは富農層と都市の小ブルジョア層であり、すなわち、先進地帯で農民的ブルジョア化のコースをすすめる富農層と、共有権に大きく依存して生活していた中小農が、封建的再編を強行しようとする絶対主義君主・封建領主と上からの近代化をすすめようとする地主とを攻撃したのである。その際、抵抗の基盤として利用されたものは村落共同体であった。

この同年におこった二つの農民一揆に共通する特徴は、絶対王政にたいする反封建闘争であるとともに、また絶対王政と結びついて上から近代化をすすめる地主層にたいする闘争でもあったという点であり、もはや、「恩寵の巡礼」においてみられたような、地主層と一般農民との「同盟と指導」の関係はまったくみられない。私たちは、そこに、絶対王政の進行を、はっきりと読みとることができる。

ところが、やがて絶対王政末期・市民革命前夜に各地に勃発する農民一揆においては、富農を中核とする一般農民のなかに、新たにジェントリ層が加わってくる。これは、基本的に封建勢力である絶対王政にたいして、相互に利用し利用されつつ発達してきたジェントリ層が、いまや、絶対王政の枠を破るまでに大きく成長してきたことを意味する。こうして、一六四二年、内乱が勃発し、イギリス市民革命が開始される。

革命闘争は、いわば、これまで絶対王政にたいして闘ってきた農民一揆の総決算であった。敗れても敗れても、くりかえしくりかえし闘ってきた農民闘争の経験の積みかさねがあってこそ、革命陣営の大きな結集が可能であったのだ。近代的小ジェントリ、富農、中小農、都市の進歩的市民、日雇労働者たちが結集して、あくまで封建的支配体制を固持しようとする絶対王政と闘った。そして、今度こそ絶対王政が打倒され、共和制が宣言された。共和政府は封建的土地所有と封建的諸権利を撤廃し、封建的諸関係を破砕したが、そのあとにブルジョア的地主的土地所有権を確認し、地主による土地独占をもたらし、農民的土地所有の実現をおこなわなかった。イギリス革命は地主革命で停止し、農民革命にまで展開しなかった。最後に、富岡氏は、次の言葉をもって、本書を結んでいる。

「農民一揆は歴史の歯車を回転させた起動力であった。個々の農民一揆は、暴力や欺瞞や裏切りによって、つねに敗北したが、大きな歴史の流れのなかでみれば、農民たちの流した血は決して無駄ではなかった。権力にたいする農民の抵抗こそ、まさしく歴史を前進させてきたのだ。その意味で、イギリス農民一揆の歴史はイギリスの進歩の歴史である。」（六五六ページ）

4

以上、簡単にその論旨をたどったように、本書は、中世中期以来、市民革命にいたるまでのイギリス封建制の解体過程を、農民の反抗と、それにたいする領主の対応という最も基本的な一線において、鮮明に画き出している。しかも、その論旨が、今日、可能なかぎり蒐集されたデータによって実証的に裏づけられている。イギリスにおいてさえ、このようなすぐれたイギリス農民一揆の通史は、今日なお現われていない。

きわめて錯綜したイギリス農民一揆の歴史のなかから、このように明確な基本線を見出すことができたのは、冒頭にも述べた著者の明確な学問態度に基づくものと思われるが、しかし同時に、このことが、また、著者のイギリス農民一揆史についての理解に、一つの限界をなしているようにも、私には思われる。

著者は、イギリス市民革命について、農民闘争の敗北によって市民革命の民主的発展は阻止され、地主的土地所有権を確立した時点で市民革命は停止したから、それは「ハーフ・ストップのブルジョア革命」であったと主張される（六五六ページ）。もちろん、著者は、ブルジョア革命と社会主義革命とを混同して考えておられるわけでは毛頭なく、たとえば、同じページに、「私有財産制否定の主張は、もはや市民革命の枠をこえ、社会主義思想の源流といえよう」と記しておられることからも明らかなように、私有財産制の確立をブルジョア革命の経済的意義と考えておられるようである。と、すれば、おそらく、ブルジョア革命は、農民的土地所有権の確立にまで押し進められたとき、はじめて「ハーフ・ストップ」でない「完全な」ものになる、と考えておられるのであろう。

しかし、私有財産制一般が確立され、その一環として土地所有権一般が確立されるならば、それでブルジョア革命の経済的意義は充分にみたされたのであって、その土地所有権が「地主的」であれば「ハーフ・ストップのブルジョア革命」であり、「農民的」であれば完全な徹底したブルジョア革命であるということになると、そういう論理は、私には全然、納得がいかない。もともと、封建的土地所有の特徴は、一つの土地の上に重層的な保有者の存在することであって、もし、ここに、私有財産制を確立するとすれば、その保有者の内のただ一人のみを排他的に所有者とすることになる。したがって、もし地主的土地所有を法認すれば、その下にある農民の土地保有権は、当然、土地所有権としては否定されねばならない。むしろ、ブルジョア革命は（土地問題にのみ限定していえば）、領主的土地保有権がブルジョア的土地所有権によって打倒される段階なのであるから、そのような時点で領主階級を打倒しうるものは、ブルジョアジーとブルジョア的地主（領主と同じ大土地所有者ながら、一切の封建的特権をもたぬもの）との連合軍が中核となるような階級勢力以外にはなく、まだ農民が勝利しう

る歴史的条件はない。農民が勝利するためには、それが連合すべきプロレタリアートが一般的に成立していなければならないが、そのような時点は、少くとも、すでに産業革命が相当に進行した時点でなければありえない。

富岡氏も考えておられるように、もしも、ブルジョア革命の経済的意義を私有財産制の確立に求めるならば、その時点においては、私有財産制確立の帰結である産業革命はまだ開始されていないのが一般的な状況であるはずであるから、ブルジョア革命は、当然、地主革命で停止すべきものである。だから、富岡氏のいわれるような、「絶対王政が打倒され、（中略）共和政府は封建的土地所有と封建的諸権利を撤廃し、封建的諸関係を破砕したが、そのあとにブルジョア的地主的土地所有権を確認し、地主による土地独占をもたらし、農民的土地所有の実現をおこなわなかった。イギリス革命は地主革命で停止し、農民革命にまで展開しなかった」（六五四ページ）のは、むしろ、本来的なブルジョア革命の在り方なのである。

いったいに、イギリス社会の近代化にかんして、著者の地主階級にたいする評価は、きわめて低い。このことは、農民にたいする評価がきわめて高いのと、まさに対照的である。（先に引用しておいた本書の最後の言葉に、このことは明瞭にあらわれている。）しかし、中世中期以来しだいに発達して、遂にブルジョア革命によって領主階級を打倒するにいたった地主階級のイギリス社会の近代化にたいして果した役割は、もっと高く評価されなければならないのではないか。このような著者の考えは、本書において、ブルジョアジーおよび地主の発達についての記述がきわめて少ないことと、おそらく、無関係ではあるまい。著者は、「権力にたいする農民の抵抗こそ、まさしく歴史を前進させてきた」といわれるけれども（そして、そのことを否定するのでは、毛頭ないけれども）、ちょうど、社会主義革命の主導勢力がプロレタリアートと農民であったように、ブルジョア革命の主導勢力はブルジョアジーと地主であったのである。

このような著者の地主否定・農民尊重の考え方のうちに、著者みずから認めておられるような、敗戦直後の激動期に人格形成がなされたという事実が、明瞭に示されているように、私には思われる。当時の日本は、まさに著者のいわれるように、「古い権威や価値体系はすべてくずれ去り、きびしい深刻な現実のなかから、新しいものが生れ出でようとしていた。日本の歴史のなかでいまだかつてみられなかったほどの昂揚をしめした労働運動や学生運動は、若い私の情熱をかきたてた」（序一ページ）という時代であった。長いあいだ、日本社会を「半封建的」な状態におしとどめていた地主制は音をたてて崩壊し、農民運動は民主的なスローガンをかかげて、全国的に昂揚した。この時点においては、日本社会の近代化にたいして、明瞭に地主は悪であり、農民は善であった。しかし、著者は、このような日本の敗戦直後の状況を、あまりにも無媒介に直線的に、イギリス中世の農民運動の中にもちこんではいないだろうか。たしかに、「その意味で、本書は戦後日本の激動期の生んだ一つの所産であるかもしれない。」（序五ページ）

もちろん、かく言う私自身もまた敗戦の落し児である。あの激動の社会に生きたことを、苦しかったけれども、貴重な得がたい体験であったと思っている。「なぜならば、この時期こそ日本の歴史のなかでもっとも民主的なときであり、かつ歴史を圧縮した形で経験させてくれた時期であったと信じているから。」（序五ページ）私もまた、著者とともに、この貴重な経験を大切にして、それを今後の研究に生かしていきたいと思っている。

しかし、その貴重な体験を生かして、過去の、また外国の史実を分析していこうとするばあいには、その体験と史実とのあいだに、多くの媒介項を必要とするのではないだろうか。それぞれの階級のもつ歴史的役割は、時代により場所によって、当然に異なっているであろうから。私たち敗戦直後に人格形成をおこなった世代にとって、あの時期の体験はあまりにも深刻であったがゆえに、ともすれば、私たちは、その体験を無媒介に直線的に、あらゆる対象に投入しようとする。これは、著者に反省をうながすというよりも、むしろ、私自身の日頃の態度にたいする反省である。敗戦直後の貴重な体験を、ほんとうの意味で研究に生かすということは、まことに至難の業である。しかし、富岡氏もいっておられるように、そこにこそ、私たちの世代のもつ特権と使命があるのだと思う。（A5判　六六二ページ　年表・索引四四ページ　昭和四〇年三月創文社刊　定価　三五〇〇円）

（京都大学助教授）